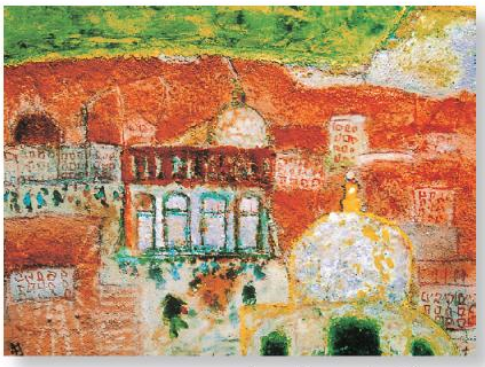
「画家」と「前進座」が両輪をなす

画家　武藤挺一

Interview

勧進帳より　延年の舞（100号）



クロアチア　トブロヴニク（6号）

ヨーロッパの風景、花、歌舞伎の勧進帳などをテーマに、テンペラ画独特の軽やかな色彩で描かれた心象風景。武藤挺一さん（63歳）の絵には不思議な魅力がある。

独学で絵を描き続け26歳の時に二科展初入選。1992年にローマ賞受賞、93年会友賞、95年二科記念大賞を受賞。97年に会員に推挙された。30年来、出品作のテーマは勧進帳である。昨年、新国立美術館で開催の92回展では会場の天井の高さに見合うよう、300号の作品を出品した。

勧進帳を描き続けるのは武藤さんが劇団「前進座」の制作副部長というもう一つの顔を持つ人だからである。日本文化の代表としての「勧進帳」にこだわる。「中村富十郎の勧進帳は舞台狭しと動くダイナミックなものでしたが、今の役者は段々自然体になったというか、身体を殺しているような気がしますね」

毎回1年間かけて構想を練り、劇団の仕事が空く夏に、一気に仕上げている。「舞台に精通した人ならではの絵。自由に想像できる構図、何より色がいいですね」と武藤さんの作品を何枚も所有しているファンの方は話す。

武藤挺一さん

茨城県水戸市の出身。東洋大学に入り、演劇サークルを作った。シナリオの専門学校にも通い、卒業後はアングラ劇団にいたこともあるが、花柳事務所を経て、33年前に前進座に入った。最初は観客動員する営業担当、それから制作部門へ。現在5年がかりで永六輔氏作・演出による公演へ向けて取り組んでいる。

劇団の仕事は忙しい。国内に出張して心惹かれる風景に出くわしても、描く時間が取れない。

「あとで休暇を取ってしっかり描こうと思うのですが、仲間が働いている国内では忌引き以外の休みは取りづらいし、事実実行できませんでした」

92年二科展ローマ賞受賞で初めてイタリアへ出かけて以来、毎年1回、画題を求めてヨーロッパへ旅している。海外の方が日常の仕事から離れ、集中して描けるからだ。1昨年の暮れから1年がかりで塩野七生著「ローマ人の物語」文庫本33冊を読破した。するとこの15年の間ローマ時代の領土を回っていたことに気づいた。民族も宗教も言葉も包容したヨーロッパの風土と歴史に魅せられ、描き続けている。

そして追求し続けるのは「色とは何だ」ということ。色は生命体のかけら、そのものの色をどう表現できるか。同じ物を見ても眼の力で、年々認識が変わってくる。ヨーロッパの街並を表現するのに、現地の砂をカゼイン（動物性の糊剤）で定着させる様式も武藤さんならではものだ。

この新年は1月に開く個展のため、クロアチアで迎えた。個展は年に4～5回、吉祥寺のリベストギャラリー創や小平市のNMCギャラリーなどで開く。なじみのファンが多いNMCギャラリーでは3月27日から4月1日まで開催される。

西東京市在住